

# 文法から広がる言語の世界

松居 琢実



## 1 文法は身近なもの

英語の授業をしているときに、ふだん見過ごしている日本語の問題に出くわすことがままある。

生徒：先生，I want a new racket. の a new racket は目的語ですよね。

私：そうだよ。

生徒：じゃ，日本語にするときどうして〈新しいラケットが欲しい〉となって，〈新しいラケットを欲しい〉とは言わないのですか。〈～を〉となる部分が目的語で〈～が〉となる部分は主語になると思うのですが…。

私：日本語で目的関係を表すときにいつも〈～を〉を使うわけではないんだよ。〈お金が欲しい〉〈りんごが食べたい〉〈この学校に入れば英語が学べる〉〈この病院で最先端の治療が受けられる〉〈彼女が好きだ〉〈あの人が嫌い〉どれも日本語として自然でしょう。僕たち日本人は無意識に〈～を〉と〈～が〉の使い分けをしているけれど，ちゃんと法則性もあるんだよ。

上のように普段気づかずに過ごしている日本語の細かいところを英語の時間に生徒とともに考えていることがある。ちなみに上記の〈～を〉と〈～が〉の交換性の法則については金田一春彦氏の『ホンモノの日本語を話していますか？』（角川書店）に詳しい。氏によれば，「〈～を〉を〈～が〉に置き換えることのできる場面は三通りあり，一つは希望を表すとき，二つ目は能力を表すとき，そしてもう一つは好き嫌いの感情をあらわすとき」とある。日常的に使っていることばに

も実はいろいろな約束事がこめられている。そういう説明を加えていくことで生徒の言葉に対する感度を高めていきたいと思っている。文法とは言葉の使用者が無意識に従っている，とても身近なものであることを理解させたい。

## 2 文法を学ぶ意義

『新明解国語辞典』（三省堂）によれば文法は，〈その言語体系において，語句と語句とがつながって文を作る時の法則〉と定義される。言語の使い手がその法則を学ぶ意義がどこにあるのか。それを考える手がかりは，言語の種類を問わず，言葉の世界で生きてこられた方々のひとこと，ひとことにちりばめられていると考える。

国語学者の大野晋氏は『日本語練習帳』（岩波書店）の中で「言葉を使うときはいつも相手と関わりたいという心をもつとき。相手が自分について，また自分の思うことについて分かっていないところがあるのを，分かってもらいたいと相手に求め，相手の注意を引き，相手の知らない事柄を知らせる。そういうときに言語を使う。泣くとか抱きしめるという行動でそれを表すこともある。言語はそういう表現行為の一つです」「言葉は制度とか決まったものとかではない。しかし思うままに造形する絵画のような，主体性だけによってなされる表現行為でもない。言葉には社会的な規範がある。その規範にかなう形式に従わなければ，主体的に自分の気持ちや事柄を相手に表現することはできない。受け手は規範に従って表現を受け取り，理解につとめる。聞くことも読むこと

も、主体的な能動的な行為です。それは規範に従うことを通して成り立つ」と述べられている。自分の感情や思考を相手に的確に発信し、相手の言葉を正確に受信するために、英語においても日本語においても文法上の知識を身につけ、技能を磨くことは非常に有意義なことなのだと感じることでできる論である。氏の主張を英語の教師が授業で扱っても十分に生徒の心に届くものと考えてる。

文法を授業に持ち出せば、「難しいことは覚えんでもええやん」とか「分かったらええねん」とか「通じたらええねん」と言う生徒が出てくる。彼らの主張をはねのけながら、日本語にしる英語にしる、文法知識を積み上げていかなければ、いい話し手にも、いい書き手にも、またいい読み手にも聞き手にもなれないことを説いていかねばならない。「言語の主たる役目は、伝達行為（コミュニケーション）にあるといってもよいと思う」と『日本語と外国語』（岩波書店）の中で鈴木孝夫氏は言われている。ところが、伝達行為をしたいと思っても相手と文法知識を共有していなければ、相手の言い分もわからないし、自分の意思も通じない。文法が欠落すれば、言語の主たる役目を果たせないことになるのだ。

### 3 文法への学習意欲を高めるために

文を作る時の法則が無秩序で場当たりのものだと感じさせたのでは、学習者にとって最も大切な学習意欲を削いでしまう。また、文法の指導中に難解な文法用語を多用し、文法の中でも例外的な用法をことさら強調したのでは、生徒の興味は薄れるばかりである。言語を共有する者の間に誤解が生じぬよう、長い年月をかけて醸成されてきた文法の秩序正しさに目を向けさせたい。

文法は秩序正しいとはいっても、身につけるべき文法事項の数量に生徒たちは圧倒されてしまいがちである。手強そうだがやってみようと思わせるためには、教師の側に相応の哲学が要求されるのではないか。「試験に出る」とか「入試対

策」という文句だけではモチベーションを十分に喚起することは難しい。文法の丸暗記に主眼を置かず、豊富な文法知識を得たときに広がり、高まる言語の世界を展望させたい。文法を体得して実感できる次のような達成感を絶えず伝えたい。

○英文の成り立ちを知ることで、日本語の理解も深まる。

○英語、日本語ともに読解力が高まる。

○英語、日本語ともに作文力がつき、かつ話す力も聞き取りの能力も増す。（発信も受信もできるようになる）

以上のような利点を説きつつ、文法を押さえることで言いたいことが簡潔かつ明瞭に文章化できることを示したい。また、文法事項を含んだ英文を日本語にしたときに、その文が非常に身近な表現であることにも気づかせたい。

例：That's the same T-shirt that you bought yesterday.（関係詞）

あれは昨日君が買ったのと同じTシャツだね。

This is the store where my mother works.（関係詞）

ここが母の働いている店です。

Have you ever taken a plane trip?（完了形）  
飛行機で旅行したことがありますか。

I wish you had told me earlier.（仮定法）  
もっと早く言ってくれたらよかったのに。

If I were you, I'd quit that job right now.（仮定法）

僕だったら、今すぐにでもその仕事やめるよ。

I'll make him call you back.（使役動詞）  
戻ったら、お電話させます。

やや複雑な状況も文法事項を使うことによって相手との意思疎通が容易になるのである。

（まつい たくみ・滋賀県立甲南高等学校教諭）

---

●大修館版〈文法〉教材のご案内

**Genius English Grammar**

（A5判・税込定価600円）

基本的な文法事項の定着から大学入試までカバー。

---